

## 公憤の旅人 — H. フィールドिंगの 『リスボン航海記』について — (1)

雲 島 悦 郎

### はじめに

H. Fielding (1707—1754) の *The Journal of a Voyage to Lisbon* (普通簡単に *A Voyage to Lisbon* と呼ばれるが、以下更に略して VL とする) は作者の亡くなった翌年に出版された<sup>(1)</sup>。彼は幅広い創作活動を行ったけれど、一流の評価を与えられるのは小説家としてのみであり、それ以外のジャンルの作品はどうしても副次的なものと思われ、彼の小説作品の理解を深めるための参考資料としての役割を負わされることが多いが、それでも本論で扱う VL はやや例外で、もっと独立した扱いを受けるに足る価値を持つものと思われる。

彼が1754年に病氣療養のためにリスボンに旅立った時には、肉体は病にずたずたに蝕まれ、自分の体もなかなか思うにまかせぬ状態だった。しかし、だからと言って彼はそれ迄闘病生活と言える程の活動停止状態にあった訳では決してなかった。もっと早く治療に専念すべきであったにもかかわらず、治安判事としての公務の多忙にかまけたりして、ついついその時期を先に延ばして来た。その挙句が一時は病をいくつも併発し<sup>(2)</sup>、そして Queen of Portugal 号に乗船した時には、自分一人の力ではどうにもならず、椅子に座ったまま滑車で甲板につり上げられるというみじめな有様になった。彼の病にやつれた恐ろしい程の顔付きは、妊婦に胎教上の悪影響を心配させた程だという。彼は *Tom Jones* (1749, 以下 TJ とする) 中の

Allworthy の口を借りたりして<sup>6)</sup>、常々哲学と信仰に結びついた死への心構えの重要性を説いて来たが、その言葉通り、自身でもこの旅に出立する段階で既に、おだやかに死にのぞむ覚悟はできていた。心残りと言えば、後に残される家族の生活のことだけであった。しかし、こういう体調や心境にもかかわらず、元来精力的な彼は、旅に出てからも病み呆けていたのではなく、食欲も結構旺盛ならば、外界への関心も一向に衰えを見せなかった。相変わらず人との交わり (conversation) を好む彼だが、船旅の途中、時として訪れる無聊を慰めるために思いついたのがこの航海記の執筆であった<sup>4)</sup>。が、又これが少しでも残された家族の収入につながればという遺産としての淡い期待もあった。

この作品には、人生の最終段階に至り、いわば人生の総まとめを行い、達観の域にも達した一人の社会派作家の、自身の個人的経験に即した、それまでの作品には聞かれなかった程の生の声が、社会への遺言のごとく綴られている。この点で彼の物の見方や考え方、そして人となりを知る上で非常に貴重な資料であるが、最初の方で述べたように、この作品の意味はそれだけにとどまるものではない。

## 1. 旅と紀行

彼はこの旅行記をその Preface の中で“history”と呼び、その限りでは彼の代表的小説 *TJ* と同じ範疇に入るものとしている。そういう意味でもこの作品は彼の小説作品に伍す重要性を持つ訳だが、本論ではこの作品を一番普通の扱いをして、何よりもまず紀行文学というジャンルに属するものとして考えて行くことにする。

イギリスにおいて、紀行文学が真に文学としての正当な評価を受け、その convention<sup>6)</sup> まで認められる程ジャンルとして確たる地位を保っていたのは十八世紀だけだった。この時代は、交通の便が良くなったというような小さな事柄から、特にこの世紀の後半におとずれた国家間の比較的な平和といったような大きな点にいたるまで、種々の理由で外国旅行がし易

くなり、grand tour さえも最早 貴族の子弟の特権ではない観を呈して来た。又、大陸にある異国への旅だけではなく、自国の地方への関心もともに高まり、国内の偏境の地への旅さえ頻繁に行われるようになった。そして銘々異なった目的を持って旅をした人達が、自分の経験をそのまま綴るか又はそれを土台にした虚構のものなど、夥しい数の作品が出版されていた。こうしたものの中に、Addison や Defoe や我らが Fielding や Smollett, それに Sterne やかの Dr. Johnson に至るまでの一流の作家達による紀行文形式の作品が含まれるのである。そして、これらの人達がこのジャンルに相当の価値を認め積極的に取り組んだことが、その文学性を高めるのに資したのである。とは言え、実際自分で旅をしていないのに、適当に資料を漁って、いかにも実際の経験に基づくかのように見せた偽の旅行記や、初めから明らかに虚構と分らせるもの、そしてあり得ない架空の地への旅を記したものはやったので、内容的にお粗末なものも多かった。

同じ旅でも、陸に行くものと海に行くものは区別される。VL の Preface の論理の展開では“travel”の下位区分として“voyage”があるような印象もあるが、一般的には、“voyage”<sup>(9)</sup>と並べて用いられると“travel”の方は陸の旅を指すようである。旅をその目的によって分類すれば、多種多様で、一概にその共通した特徴をあげることは難しい。だが、本論の展開に関する極く常識的な点をおさえておくとするなら、旅の基本的な要件の第一は *Jonathan Wild* (1743, 以下 JW とする) の中で Wild の父親がいみじくも言った言葉、“...it [travelling] consist[s] in being such a time from home, and in traversing so many leagues”<sup>(10)</sup> によく表わされている。即ち旅とは、自分の生活の本拠地から相当の期間、そして相当の距離はなれることが先ずなければならないということであるが、実は作者が Wild の父親にこういう言葉を吐かせているのは、つまるところこれだけにとどまるようなものは旅と呼べないと言いたかった訳で、旅の効用を無視して旅を語ることはできないのである。この効用に関しては、ホメーロスの『オデュッセイア』の冒頭のオデュッセウスを語った表現の一部、「……諸所方

々をさ迷って、数々の人の町を見、その俗を学んだ……」<sup>(6)</sup>に伝統的な見方がよく表わされている。先程の条件にこれを加えて、自分の本来属する一つの空間から別の空間への移動の中で、所変われば品変わるという具合に、行く先々で異なる風俗習慣 (customs and manners)<sup>(6)</sup>を見て、それらの比較によって、自分の本拠地の絶対化という危険から逃がれ<sup>(6)</sup>、それと同時に、諸々の風俗習慣の底に流れる共通な人間性の本質を認めることになる。十八世紀の多くの紀行作家が“observations and reflections”<sup>(6)</sup>(所見と所感) という表現を使ったし、又比較ということを強調した。所見という、その前に観察 (observation)<sup>(6)</sup>がある筈だが、この語は視覚的ニュアンスが強いけれど、それでもその他の感覚、特に聴覚の助けを借りない観察は考えられない。だから、くだいて言えば旅行者は所々方々をまわり、見たり聞いたりして、それにつけて色々と思う訳である。但し“see”や“hear”の用法に見られるように、見るとか聞くとと言っても、必ずしも直接の外界の対象についてだけではなく、心の世界に浮かぶものについても言える。大体において、外界のものに対しての場合でも、それを観察している最中に直ぐ何か考えがわいて来ることも無論であろうが、それは余り“reflection”という語にふさわしくない。“reflection”は内観とか内省とか熟慮と訳すにふさわしく、それ故じっくり考え込めば自ずと働いているのは心の目であり、そこに浮かぶのは記憶的な像とか想像的な像のほずである。その中で、諸所で見た、とてもよく似た像や少々違った像などの間の比較が自然と行われるということになる。こういう意味での観察はあくまでも二次的なものであるが、それでも本論では特に考慮する必要がある。

ここで少し脇にそれて、今後の論の展開上踏まえておくべき Fielding の発想法上又は文体上の特徴について一言しておく。先ず二分法についてであるが、これは極く一般的に見られるものだけれど、Fielding においては特に目立つ。都市対田園といった典型的なものを始めとして、いくつかの組み合わせの例が認められるが、VL で特に中心的なものは海と陸の組み合わせである。その他、権力者 (men in power) 対それ以外の人間とか、

作者対読者というような関係が重要なものである。作者はこれら二つのものを並べて比較することによって、それぞれの特性を浮き彫りにするのを得意とするが、この比較の作業が旅の観察においても重要な役割を果たしていることは前に述べた通りである。さっきの例は対照の側面が強かったが、類比的の例も数多く見られる。類比は表現としては比喩となつてあらわれる訳で、作者がこのような方法を意識的に使っていることを示す表現として次のようなものが見出せる。

- (1) “the *analogy* between the traveller and the commentator” (p. 184)
- (2) “an ingenious *allegory*” (p. 255)
- (3) “*comparison* of the joys of a speculative to the solemn silence of an Archimedes over a problem, and those of a glutton to the stillness of a sow at her wash. A *simile*...” (pp. 255—256)

(イタリックス筆者)

二分というと、どうしても類似よりも相違に注目する感じが強くなるが、分けるという意識がうすれた場合は、反対に類似性が問題になる訳である。Fielding が自分の小説作品を *romance* と比較して、それとの相違性を強調した反面、今度は古代の叙事詩と並べ、その類似性に注目するが故に自らの作品のジャンルを “comic epic poem in prose”<sup>63</sup> としたのもその例である。この他にも、彼は自分の作品を伝記と比較して、その相違性について触れたり、又歴史と並べてその同一性を強調した<sup>64</sup>。そして、VL をもこの歴史の中に含めたのは既に述べた通りである。Fielding の作品の中で、このような比喩的発想法を特徴的にあらわす構文として、As A ～, so B～。というのが非常に目につく。この場合、A, Bは必ずしも主語ではなく、それぞれのまとまった表現の中の中心的概念と考へていただきたい。今のは又 A ～ what B ～. の構文となつてもあらわれる。これらは A ～ like B. という表現に近いから、直喩的でわかり易いが、これが A ～, B ～. というように二つが並べられるだけで直接関連を示す語句が

ないと、一種の同格表現であり間喩的であって、両者が類比されていることを見落す危険性がある。この並置的表現に関連して言えば、A or B というような言い換え表現も又大切である。この時、もしBの概念がAのそれに含まれる場合は、Aの中でも特にBが強調されることになる。又これと似ているのがA rather than Bという構文である。その中でも、Bは否定しながらも、その純粋な形のB'を却って印象づけるような一種のunderstatementと認められるものもある。いちいち断りはしないが、今後折りにふれて、これらの具体例をあげていく。

本題に戻る。比喩と言えば、古くから人生の喩えとしてよく用いられたimageに舞台と旅がある。旅程や宿駅のことをstageと言ったりすることから考えても、この両者は相当近似したimageであると思われる。Fieldingは人生の比喩としてはよく舞台の方を使い、旅の方は物語の形式として用いた。作品の中心的人物の多くは、どこからか旅立ち、又そこに戻って行く。そしてその過程で彼等は何かを学び取ることを期待されている。その知的活動の根幹を成すのが、見ることと聞くことである。知の役割<sup>99</sup>が人生をより豊かに生きるようにすることであるとしたら、旅には多分に人生修業的な意味合いがある。こういう意味で“pilgrimage”などは旅を表わす語として特に捨て難い響きを持つ。それから、知は己の経験からのみ得られるものでもないし、それのみを頼りにしたのではあやうい。そこで旅に教育的な効果を求めるなら、そこに自ずと先達としての同伴者の存在が必要になる。かのテレマコスの旅には、知の神アテネがメンタールに変身して付き添い、艱難に際し適切な助言を与えた。大陸漫遊旅行に付き添うgovernor (mentor)もそうした役割を担う。Fieldingの作品の中では特に*Joseph Andrews* (1742, 以下JAとする)のAdams牧師がその種の役をつとめる代表的人物である。

人生と旅との関りがこのようなものであれば、人生を写すとも言われる文学が旅と近似性を持つのも又当然である。作品の読者は、いわば“traveller in books”<sup>100</sup>であり、作者は読者に同行するcompanion<sup>101</sup>でありそ

れ以上に mentor である。この引卒者が旅人の注意をどこに向けてくれるかにその旅の成否がかかってくる。旅で見聞するものと言えば、往々にして日常の生活空間にはない物珍しいものでなければ意味がないと考えがちだし、旅行記の多くもそういうものを書き連ねたものになる。しかし、Fielding はそのように curiosity に訴えるものを否定する。好奇心を積極的に受け止めた他の作家達<sup>90</sup>と比べてこの点が特異である。

紀行文の起源を探るならば、Fielding の示唆するように、Homer の *Odessey* はその元祖とも見做してよさそうでもあるが、ただ惜しいことに真実の記録という点で不十分である<sup>91</sup>。真実を記録した旅行記が Fielding の考えているように“history”に入るものなら、その逆に古代の歴史書も、もし色々な土地を回って、そこでの見聞を書き留めたものという側面を持つなら、その限りでは旅行記に非常に近いものと考えられる。彼は古代の幾人かの歴史家に言及するが、Herodotus とか Thucydides とか Xenophon には満足の意を表明するものの、真実の記録という観点から Hesiod に対しては少々、Pliny に対しては大いに不満を示す。これに多少関連すると思うが、彼は“historian”と“antiquary”を対比して次のように言っている。

There are, indeed, two different ways of tracing all things used by the historian and the antiquary; these are upwards and downwards. The former shews you how things are, and leaves to others to discover when they began to be so. The latter shews you how things were, and leaves their present existence to be examined by others. Hence the former is more useful, the latter more curious. The former receives the thanks of mankind; the latter of that valuable part, the virtuosi. (pp. 205—206)

歴史が、現在を基点にして現在の記述に重点を置くもので、それ故に役に立つものであるのに対し、古物研究は過去の事情に単なる好奇心を示すだけで現在とのつながりがないので好事家の役にしか立たないと言っている。

訳だが、これは現在にとって有用な情報を何らもたらさぬ単なる事実の羅列などには意味を認めないという実用主義者 Fielding の基本的な姿勢のあらわれである。又、古代の歴史の大家の記述にも真実の点で怪しい所があるのだから、ましてやただ過去の事実を追うだけの好古家の主張は往々にして真実として疑わしいということになる。そして、作者はある若い好古家の旅の起源に関する眉唾物の研究を紹介すると共に<sup>8)</sup>、このような人達の団体のことを皮肉たっぷりと次のように言っている。

...I flattered myself that the spirit of improving arts and sciences, and of advancing useful and substantial learning, which so eminently distinguishes this age, and hath given rise to more speculative societies... would assist in promoting so curious a work; a work begun with the same views, calculated for the same purposes, and fitted for the same uses, with the labours which those right honourable societies have so cheerfully undertaken themselves, and encouraged in others; ... (p. 204)

この中で“so curious a work”というのは、先程の旅の起源をさぐることを指しており、好古家にとっては興味深くとも、実際は興味本位に過ぎず、目的や効用などの点からも、有用で実のある学問というものとは無縁だという主張が反語的表現の中に読み取れる。

徒らな起源探しになる危険を避けて、十八世紀の紀行文学の受け継いだもっと近い流れをあげるなら、特に中世にキリスト教国一般に流行した聖地巡礼の経験を実用や娯楽の目的で著わした数々の旅行記の類にもつながっていると言える。“pilgrimage”が旅一般を意味する語として長い間用いられたのも、その昔巡礼が一般の人達にとって一番なじみのある旅だったばかりでなく、それが内包する意味故に比喩的用法に適していたからだと思われる。中世の文字通りのpilgrimageは往路のみの模様を記したものが普通だったようである<sup>9)</sup>。FieldingのVLも往路のみの記録であるが、し

かしこの場合は先ず彼が旅先で客死したからである。同じ往路のみの旅行記と言っても、道中の描写は念入りでも目的地に関してはあっさり片付けたものもあり、こういうのが正に道中記と呼ぶにふさわしい。人生と文学の比喩関係から考えても旅行記で目的地の描写がさりげないのは一応納得が行くようにも思えるが、理由は無論それに限らない。“voyage”と名のついた作品でも必ずしも船に乗っている時のことが中心とは限らないから、この語は海外旅行記とでも訳すのが適当な場合もある。しかし Fielding の航海記では目的地 Lisbon の描写は至って簡潔である。作品の中にその理由を求めれば、作者がこの都市を余り語るに値するものとは考えていないこともその一因であろう。当時の世界情勢では他国への無理解<sup>60</sup>も仕方のないことかもしれないが、彼は Lisbon の建造物をこきおろした後で、“the nastiest city in the world”<sup>61</sup> という辛辣な呼び方をしている。しかし何よりも先ず、他国に注目する余裕が彼にはもはや残っていなかったからだと思われる。

更に近い所に紀行文学の伝統の流れを求めれば、ルネッサンスの頃から特に出回った、大陸旅行の経験を綴ったものとか、Royal Society 設立以後増えた海外の科学的情報を伝える報告書の類もあげられるが<sup>62</sup>、これら純粋な紀行文だけではなく、*Don Quixote* を初めとし、悪漢小説などの旅の形式をとった純粋な虚構作品も、紀行文学に大きな影響を与えたものとして忘れてはならない。

船旅を陸の旅に重ねて見れば、船は駅馬車と旅籠が一緒になったようなものだから、食事の点などで便利ではあるが<sup>63</sup>、乗り物の外の世界と接触する機会が少なく、それも Fielding のように貨物船の旅行ともなれば、どうしても変化に乏しい。そうなると旅人の経験の範囲も当然狭くなる訳で、それにつれて外界の観察の比重が低下して、内側の世界をのぞくことが多くなる。VL でも“observations and reflections”ということ言うが、一つにはこの表現が同義語を並列した一般的な決まり文句のようになっていたこともあろうが、もう一つには、この作品が見ることよりも思うこと

の方に傾いているため、“observations”が“reflections”の方に強くひかれ、その辺りの意味で両者はほぼ interchangeable に用いられている。作者は Preface でこれに関連し次のように言っている。

As there are few things which a traveller is to record, there are fewer on which he is to offer his observations: this is the office of the reader; ... Some occasions, indeed, there are, when proper observations are pertinent, and others when they are necessary; ...

この中では、“observations”は意見とか見解の意味でつかわれ、記録と対置されており、紀行作家の任務の第一は記録することであると考えることがわかる。記録とは観察したままを記すことだから、紀行作家にとっては観察が大前提で、意見を述べるのは必要な時に限るような口振りに聞えるが、本文に入ると実際は意見を聞いてもらいたいという気持が先行している。そういう意味では“observations”は“observe”の意味のうちの「観察する」というより「述べる」という方の名詞形と言える程である。作者は所によって変わる世態風俗を観察するとは言うが、思いもかけぬ風変わりなものを見付けるつもりはない。今度の場合、発見と言っても、それは彼が常々思っていることを証拠立てる別の例を見付けることに他ならない。そして比較という手続きの方も、その基本的な性格が類似点と相違点を見出すことであるとすると、彼は主に類似点に注目し、既に見つかっている証拠に駄目を押す形で同類の証拠を集めているような所があり、新発見と呼べるようなものは VL には余りない。旅先で外界の対象に触発されて作者の心に浮かぶものの多くは、出発地で見たり聞いたり思ったりしたことである。彼にとっては、船の中や、それが停泊する土地で触れる世界と、後に残して来た、二度とその土を踏むこともなからうと覚悟した世界が同時に存在し、愛国者 Fielding の思いは常にどうしても後者の方に引き戻される。

## 2. 作者と読者

*VL*は *Dedication to the Public* と *Author's Preface* と *Author's Introduction* とそれに本文の四つの部分から成り、*Dedication* を除いた残りの部分を作者が書いている。そして *Preface* の方は主として作品の形式について、それから *Introduction* は結局のところ作品の内容に関して意見を述べたものである。この両者については、既にいくらか触れているが、ここでは作品の内容との関連で特に *Introduction* についてより多く付け加えることになる。

*Preface* の方では、作者は“travel-writing”も“history”の一種であると言ったのだが、それによって一番言わんとしたのは、要するに“truth”を表わすものだということである。だが、いかに事実 (facts) であっても、ただその事実やそれについての“comments”を徒らに羅列するだけでは真実について語ったことにはならぬことを強調し、むしろ積極的に“overlook”することの重要性を訴えていることが注目される。ではこの取捨選択は何に基づいて行われるかという、それは作者の主要な関心と、その為に自らに課した役割によってであると考えられる。そして窮極的には、選択された情報が真実を伝えるものかどうかの決め手は、作者が“historian”と“antiquary”を対置していることにも明らかなように、その情報が人生や社会にとって有用かどうかである。有用性というのは往々にして現実と結びつき、具体性を伴うものになると思われる。その点、*VL*においては、作者と読者との関係が一般的であると同時に、それ以上に特殊であり、提起される問題も特殊で具体的である。

ある特定の人物の個人的経験を縦糸にして、それに諸々の横糸をからめて人間(社会)の真実を描いていくような形の小説では、私事と公事の両方をうまく織り込んでいくことが出来るが、それでも私事への関心が公事への関心より大きな比重を占めるのが普通である。ところが *VL* のように旅行記になると、主人公はどちらかと言えば作者自身であって、この点かなり事情が違って来る。というのも、この時代の紀行文学においては、ego-

centricになるのを嫌ったこともあり、作者が自分自身について多くを語るのを好ましくないとする convention があったと言われる<sup>88</sup>。作者は作品の中心的人物であっても、決して読者の関心の中心になってはならないのである。Fielding にもこれに近い意識があったと思わせる所が VL にも見出せる。例えば “... not to trouble the reader with anecdotes, contrary to my own rule laid down in my preface, ...” (p. 194) という箇所がそうである。これは直接には Preface で、単なる事実の羅列を戒めたことに言及しているが、そこには次のような言葉もある。

... [things and facts of so common a kind] challenges no other right of being remembered than as they had the honour of having happened to the author, to whom nothing seems trivial that in any manner happens to himself.

ここの、自分に起ったという以外に記録する価値は何もない事柄とは、さっきの “anecdotes” のことであり、これを語ることは私的経験を事細かに記述する中で結局自分自身について語り過ぎることになるから、彼自身の規則というのも先程の convention の内容とそう違わないことになる。自らについて語り過ぎる最悪のものは自画自賛の弊に陥ることだが、これに関連して “... that I may not be thought the sly trumpeter of my own praises, I do utterly disclaim all praise on the occasion.” (p. 270) という言葉もある。それに、航海の途中鯨が釣れた時のことについて、“I should scarce have mentioned the catching this shark, though so exactly conformable to the rules and practice of voyage-writing, had it not been for a strange circumstance that attended it.” (p. 277) と言っているが、ここの “the rules and practice of voyage-writing” は自分の外にある convention を彼が意識していると思わせる表現である。そして VL においては、自分自身について余り語らないということは、自分であれ他人であれ、個人の私的な事柄を余り問題にしないという姿勢と重なる。私

事よりも公事に重点が置かれ、たとえ私事にわたる場合も、ただの私事として終らせてはいない。そして、その好例がこの作品の Introduction である。そこでは、自分の病気や治安判事としての仕事についてかなり詳しく説明しているが、それがそれだけに終わっていない。旅行記の Introduction だから、作者が旅に立つに至る経過（特にこの場合、作者の病状の変化）が細かに語られるが、これが次の二点と緊密にからめられている。先ず、強盗退治のことである。当時ロンドンの街には辻強盗が跳梁し、人を殺めることも希ではなかった。業をにやした当局は、作者に治安回復の妙案を求めて来た。病を理由に一度は断ったものの、たつての頼みに断り切れず、無理をして案を練って当局に送ると、それが全面的に承認され、やがて実行に移された。すると効果は靦面にあらわれ、さしも猛威をふるった凶悪犯罪も鳴りをひそめ、ロンドンの街に久々に平安が戻って来たという。それからもう一つ次の事柄がある。痛風の他にいくつかの病を併発し、一時は回復も絶望かと思われたにもかかわらず、又小康状態を取り戻し、一進一退を続ける自分の病に対し、あれこれ治療を試みた作者は、故クロイン司教の発見した「万能薬」tar water に関し次のように言っている。

... such a panacea one of the greatest scholars and best of men did lately apprehend he had discovered. It is true, indeed, he was no physician; that is, he had not by the forms of his educations acquired a right of his skill in the art of physic to his own private advantage; and yet, perhaps, it may be truly asserted that no other modern hath contributed so much to make his physical skill useful to the public; at least, that none hath undergone the pains of communicating this discovery in writing to the world. (p. 197)

ここまで読むと、作者自身の立場と故クロイン司教の立場が非常に似かよっているのに気付く。そして、さっきあげた二つの事柄は、Introduction

の前半と後半に全く別々のことのように書かれてはいるが、実はこのように二つを並べることにより社会の病を肉体の病にたとえ<sup>91)</sup>、政治に関しては素人であっても、それだからこそ私利私欲を離れて、社会の病ともいうべきものを何では治療する万能薬とまではいかなくとも特定の病に対する特効薬の処方を書き物として世に残そうと考えている自分の役割を故クロイン司教のそれと重ねて見ていることがはっきりする。そして又、VLは作者が強盗鎮圧のために当局に提出した案文とも等しい性格を持っていることは明らかで、その点彼が晩年に著わした法律関係の論文 *An Inquiry into the Causes of the Late Increase of Robbers, &c.* (1751) や *A Proposal for Making an Effectual Provision for the Poor, &c.* (1753) などと内容的には同一線上に並ぶものと理解される。そして旅に出る少し前まで治安判事を勤めていた作者の社会的立場を明確に反映しており、内容も自ずと公的問題が中心となる。

この公的色彩の濃厚さは、特に政治的側面が際立っている事実として作者自身 Preface で “ [in this work] the political reflections form so distinguishing a part” と認めている。そして、このことが作者と読者の関係にも影響を及ぼす。Preface において “the instruction of the reader or to the information of the public” という言い換えが先ず行われ、これが Preface の最後の方で更に “instruction to the public, or to their guardians” と換えられる。読者というものは、実際には不特定多数であるが、作者と読者の関係を旅の道連れ同志のように考えると、両者は少数（典型的には一対一）でその間には私的な雰囲気強いが、“reader” が “public” にかえられると、読者が多数となり、それだけでもやや公的性格をおびる。その上、この “public” は、私利私欲に目のくらんだ “mob”<sup>92)</sup> と対照されているし、この作品の中では特に意識的に “public” 対 “private”<sup>93)</sup> の問題が扱われている。このことを考えると、この語は大衆と訳されるより公衆と訳されるべきであり、その公衆も後者の言い換えに見るように、その “guardians”<sup>94)</sup> によって代表される。そして、この “guardians” というの

は今後益々明らかになるように、広く言えば公人であるが、特に公権力を握る者の謂である。この種の言い換えは、これらの他にも幾つかあるが、次のものがその代表的例であろう。

There are many evils in society from which people of the highest rank are so entirely exempt, that they have not the least knowledge or idea of them; nor indeed of the characters which are formed by them. ...the most ignorant will be those very readers whose amusement we chiefly consult, and to whom we wish to be supposed principally to write, ...(p. 204)

ここでは、作者は社会の最上層の人達を主たる対象としてこの作品を書いていることを明言している。ただ、この前半の、社会にはこの種の人達が全くまぬがれていて、全然知りもしない災厄が沢山あるというくだりを単なる客観的な事実の記述と見るか、そういう実態は怪しからぬことだという非難とか、又そういう最上層の人達は誠に結構な御身分だという皮肉の声を聞くかによって、彼等を主要な対象としているという作者の言明をまとも取るべきかどうかの判断が変わってくる。この判断の参考のために、他にもいくつかこの種の読者を特定した表現をあげて見よう。

- (1) "...hitherto so profound a secret to *the best of the readers* ..." (p. 206)
- (2) "...trite among the generality of readers, ...are alike unknown to *my friends*" (p. 207)
- (3) "...*those* who are alone capable of applying the remedy, though they are the last to whom the notice of those evils would occur, without some such *monitor* as myself, who am forced to travel about the world in the form of a passenger." (p. 241)
- (4) "...engage the attention of *any man in power*, and should thus

be the means of applying any remedy to the most inveterate evils, at least, I have obtained my whole desire, ..." (p. 261)

Fielding の小説は、語り手が作品世界の背後に消えてしまうような *representation* を第一とするのではなく、しばらくは読者が作品世界に引き込まれて語り手の存在を忘れようと、直ぐに語り手が顔を出し、それが作り話であることを思い出させるもので、その語り口が作品の相当な魅力になるが、語り口の魅力という点では *VL* も同じである。だから、その語り口の軽妙さを一層増すためには、種々雑多でつかみ所のない実際の読者ではなく、想定された特定の読者に語り掛ける感じにするのがより効果的とも言える。しかしこのように想定された読者は必ずしも、作者が一番念頭に置いている読者だとは言えない。*VL* で作者がいくら明言しようと、その特定された読者が果して作者が最も意識している読者かどうかは、結局作品全体を通じて諸々の材料によって判断するしかない。

そこで先ず異論のなきような所を前提として設けてからこの問題に取り組むことにする。そうすると、作者がこの世に諸々の“evils”があり、それらを除去しなければならないと考えていることは間違いない。そして、*VL* が船旅であることもあり、主として海上におけるこの種の“evils”を絶やす必要を説いていることも確かである。彼は Preface で、“...my purpose is... to bring about at once... a perfect reformation of the laws relating to our maritime affairs” とも言うており、海事関係の法律の改正が必要であると考えていたことも疑いないが、ただ *VL* をその一助にしたいと、又ある程度そうなり得ると本気で信じていたかどうかの判断がなかなか難しい。しかし、作品を読み進んで行って次のような一節に出会う頃には、素直に額面通り彼の言葉を受け取るべきだという判断に達せざるを得ない。

I would, indeed, have this work — which, if I should live to finish it, a matter of no great certainty, if indeed of any great

hope to me, will be probably the last I shall ever undertake——  
to produce some better end than the mere diversion of the reader.

(p. 261)

これは、もう先は長くないと覚悟した憂国の士が、多分最後の作品になるであろう *VL* で、ただ単に読者を楽しませる以上の目的を達成したいという願望を真摯に表わした言葉だと理解するしかない。その線に沿って少し前に引用した(1)~(4)の内容を簡単にまとめると、作者が危険視する社会の害悪を根本的になくす力を持っている人達、即ち政治に関与でき、法を改正する力を持つ人達、特に権力者が、これらの害悪に気付いていないので、作者が“monitor”として実情を報告するから、耳を貸してもらえたら本望であると言っていることになる。茶化しでも何でもなく、正真正銘、社会の上層部の人を読者の中心と考えている訳である。すると(1)の“best”とか(2)の“friends”にはやや調子が良すぎて軽い所もあるが、やはりはっきりとした irony を認めるのは無理である。小説の世界では、彼はどちらかと言えば大衆の側に立っており、“good”は“simple”との結びつきが強いような印象があったのに、これでは彼が権力者に親しみを覚えており、又“good”は従来読者にかかる場合でも「良質な」より「善良な」の意が普通だったから、権力に近い者ほど善良だという感じを与えるので、ちょっと奇異にも思えるが、この場合“good”の意味が違っているとすれば別におかしくもない。即ち、この“best”は、善良さを表わす“good”の最上級ではなく、その中心的な意味は、“betters”（注⑧参照）の場合と同じで、階級的に上であることだと考えられる。それにもう一つ、“great”にはない読者として好ましいという意味もあろう。そうすると、“best of the readers”や“my friends”には、階級的に最も上の方の人達にこそ自分の最も良き理解者・協力者になって欲しいという気持が読みとれることになる。Fielding 本来の“good”の用法を頭において読むと、“best”と形容したからと言って人格的にもとても優れているとは言っていないぞ、という ironical な含みも多少感じられないでもないが、“best”即ち“worst”だ

という強烈な irony は決してない。因みに、VL における “good” の原級の用例を調べて見ると、これが “gentlemen and ladies” 階級を修飾する時は、まともに本来の「善良な」という意味で用いられるのに、その反対に大衆について用いられる時は大抵完全な反語である。作者が非常に悪い印象を受けた Wight 島の Ryde の旅籠の女主人のことを何度も “good woman” と呼ぶし、人の足元を見て渡し賃をつりあげる船頭達のような輩のことを “good people”<sup>40)</sup> と呼んでいる。この場合の “good” は実は “bad” に他ならない訳で、これに関連するが、作者は “... there is no trusting to any contract with one whom the wise citizens of London call a bad man;...” (p. 258) というような言い方までして見せる。「ロンドンの賢明な市民が悪人と呼ぶ者」というもって回った表現は、明らかに悪いものが一部の賢明な者にしか容易に悪と映らないという作者の嘆きを含んでいるが、これは JW で盗賊 Wild のような “wise man” にとって “good” は “foolish” に他ならなかった事実とどこかねじれたような形で響きあう。そしてどちらの世界でも価値基準があやふやになっていることが示されている。JW との関連で、VL における “great” の用法を見てみると、JW の中でつかわれた時のような irony の響きは全然ないが、反対に偉大だと賞めている訳でもなく、ただ客観的に社会的地位が上であることを表わしている。これも VL では上流階級への諷刺が影をひそめている一つの表われである。“best” とも関連し、もう一つの用例をあげれば、前に引用した箇所にも、故クロイン司教を指して “one of the greatest scholars and best of men” と言っている表現がある。この中の “greatest” にも “best” にも irony など感じられないが、それと同時に、この意味を Fielding の作品における “great” や “good” の最も良い意味に取れば、余りにも大袈裟な賞め言葉になる。そうではなく、もっと広く一般的で「とても優れた」とか「とても立派な」位の意味でしかないであろう。これだけ “best” にこだわるのは、実はもう一つ次のような理由があるからである。

それは、VL の中で、一度 “the late Sir Robert Walpole, one of the best

of men and of ministers” という表現に出会い、一瞬解釈に戸惑うからである。ここにひっかかりを覚える人が多いとみえて、この表現について Henley 版のテキストでは、Austin Dobson が次のような注を付けている。

Fielding's treatment of "one of the best of men and of ministers" had been inconsistent, to say the least. He had dedicated the "Modern Husband" to him in 1732. But in the "Historical Register for the Year 1736" he had satirized him as "Quidam." Here he returns to his first, and probably more genuine, attitude of admiration.<sup>68</sup>

ところが Everyman's Library の版に注を付けている Douglas Brooks は、これとは真反対に "The reference to him as 'one of the best of men' is doubtless ironic"<sup>69</sup> と言い切っている。"one of the best of ministers" の方ならともかくも、Walpole を "one of the best of men" と呼ばれると JW における Walpole の扱いを覚えている者はやはり面喰うであろう。そして、これを irony として片付けられれば事は簡単であるが、どうも作品のあそこの部分で Walpole に対する皮肉が出てくるのはいかにも唐突である。そこで、これをもう一度元の文脈に戻して見る。

A fleet of ships is, in my opinion, the noblest object which the art of man hath ever produced; and far beyond the power of those architects who deal in brick, in stone, or in marble.

When the late Sir Robert Walpole, one of the best of men and of ministers, used to equip us a yearly fleet at Spithead. His enemies of taste must have allowed that he, at least, treated the nation with a fine sight for their money. (p. 247)

後にもっと詳しく触れることになるが、VL 中の Fielding は simple なものより、ここの艦隊の例に見られるように noble なものを賞揚する姿勢が目

立つ。このことを頭において、この引用文の最後の方を読むと、“at least”がやや気になるが、それでも Walpole を一応評価するような 素振りがあり、Fielding も今は亡き Walpole をある程度大目に見るようになったかと思わせる雰囲気がないでもない。F. H. Dudden もこの引用箇所の前半までを含む部分を引用し、そこに次のような注を付けている。

There is no reason to suppose that the words, ‘one of the best of men and of ministers’, were meant ironically. It is more probable that Fielding, with the passing of years, had learned to appreciate the great qualities of the minister whom he had formerly reviled, and, as a sort of recantation, deliberately inserted this passing tribute to his memory.<sup>64</sup>

しかし、時代順は逆になるが、W. Cross は先程の作品からの引用箇所の後半に相当する部分を引用した後、“one of the best of men and of ministers” という表現を、Fielding が Walpole に対する長年の見方を改めた証拠とするのは誤解であり、ここでも *JW* における場合のように irony であると言い、“Fielding always regarded Walpole as the head of a body of plunderers who deceived the people by shows like the one at Spithead every year.”<sup>65</sup> と断定する。このように Walpole を「人々を欺く略奪者の一団の頭領」とするのは明らかに *JW* に典型的な見方である。そして、*VL* を読んでいる時、作者は *JW* を書いた頃とは変わってしまったかどうかという疑問が始終わいてくる。そして、この問題は今見て来たように、頭を悩まされるだけで容易に決着がつきそうにもないように見える。しかし、この困難さの一因は、我々が一気に作者自身の本質に迫り、それで全て片を付けてしまおうとすることにあるから、次のような段階を先ず一つ踏んで見ることにする。小説の場合も、語り手即作者自身ではなく作者の persona というものが想定されるが、*VL* の場合も、語り手で主人公でもある「私」を先ず作者の persona<sup>66</sup>（便宜上、当分「作

者」とする)と見て、これを間に一つはさんで見ると「作者」の主要な性格は例の“monitor”によって規定されるが、前にも述べたように、この“monitor”は「作者」の表向きの役目とか隠れ簑などでは決してなく、彼が使命感に燃えて勤めようとする役所<sup>どころ</sup>だと判断される。その彼が、上流階級の人間を中心的読者と目しながら、亡くなったとは言え十年程前迄はこの階級の中心的存在であった人物をここで表立って皮肉る必要があるか。これは下手をすると反権力の立場に立つものと見られそうで、少なくとも得策ではない。だから、この場合の“best”の意味も前の“the best of the readers”の時とあまり変わらないと考えるのが自然な読み方であり、“the best of ministers”が一流の宰相の意なら、“the best of men”は一流の人士という位の意味で、要するに rank が最上の部類に入ることしか表わさず、一定の評価ではあっても賛辞と言える程のものではない。「作者」が毀誉褒貶を離れた言葉としてつけたとしても、一部の読者には悪くすると追従にも響きかねないが、彼としては権力の側にある者に善意に理解されるなら余り問題はないことになる。

このように、本論では個々の作品を一つの独立体と先ず見て、可能な限りその内部で解釈する立場をとった。その上で、他の作品と比較するなら、VLにおける“good”や“great”の意味はJAやJWにおける微妙な含みを失い、極く普通の用法に近づくと共に、この両者の意味さえぐっと近くなっていることがわかる。VLの「作者」は言葉遣いとどまらず、その言い分にもJAやTJの「作者」と随分違うように思われる所がある。そして、それぞれの「作者」の役割の違いを考慮しても、作者自身の物の見方・考え方がある程度変ったという印象は否めない。しかし、Dobsonなどの解釈に従うと、悪く言えばFieldingは鼻もちならぬ変節漢であるが、彼がそこまで極端にWalpoleの評価を変えてしまったとは信じ難い。反対に、この時点でも彼はWalpoleに対して批判的な気持を抱き続けているかもしれない。しかし、それが本当であったとしても、VLでそういう気持を率直に表明することは又別の問題である。“best”の意

味はあくまでも、先ず作品の内部で探って行き、その上で外部の材料も参考にするべきであって、反対にたった一つのこの表現を証拠にして、Fielding が Walpole に対する昔の見方を変えたとか変えていないというような外部の事実を判断するのはどうかと思われる。しかし、作品は必ずしも完全な美的統一体ではないから、ここで唐突に作者が昔ながらの Walpole 諷刺をそれと分る一般読者にして見せ、彼等を喜ばせていると読むのもあながち無理ではない。さし当っての目的を離れた所で、文学者 Fielding が第一の話し相手をしているのはこの種の読者だからである。だが、昔ながらの諷刺なら、*JW* を頭におけば“best”よりも“greatest”の方がふさわしいはずなのに、故クロイン司教のことは“one of the greatest scholars and best of men”と両方をつかった表現をしながら、Walpole のことは“one of the greatest ministers and best of men”とは言わずに、“one of the best of men and of ministers”と言っている所が気になる。考えられる理由の一つは、既述のように、*VL* の中では“best”と“greatest”の意味が近いから、特に本文中ではつかい分ける必要がないことである。そして、両者のうちで“best”の方が採用されたのは、一つには“the best of the readers”などとの関連からであるが、その他に“greatest”が Walpole と結びつく時の ironical な効果を避けたからとも考えられる。とするなら、問題の表現を Walpole に対する irony とするのは見当違いということになる。しかし唐突な irony なら、Walpole のような大物をつかまえて“greatest”と形容しても当り前過ぎて面白くないから、普通の意味で一番そぐわない修飾語の“best”を用いたという反論もありうる。この表現に関して最近では Brian McCrea が、Fielding と Walpole の共通な政治的立場を理由にして賛辞と捉えている<sup>89</sup>。確かに、Walpole は階級的な意味だけではなく、政治的な面に関する限り読者としても、“best”な人物と呼べたかもしれない。しかし、そういう点で一定の評価はしていたとしても、倫理的な側面を加えた上でない限り Fielding の賛辞と言う訳にはいかない。

人間社会を上流とそれ以外の二つの階級に分けて考えた場合、Fielding はこれら二つは完全につながりが切れていて接点がないとは無論見えていないが、一つの融合体ともみていないようだ。上流階級の人間とそれ以外の人間はいくつかの点で全く違った世界の住人のように思えるのだ。そして、“comic epic poem in prose”の世界は主に一般人の住む所であったが、VLについてもそれは同様である。作者自身も一応その住人であることは、例えば15ページの引用文(3)の“myself who am forced to travel about the world in the form of a passenger”という言葉で認めている。そして、彼が深く関って来たこの世界こそ、自分達の国の現実を招来するに与って力があったし、又その将来を大きく左右する存在であることを百も承知している。それに対して、もう一方の世界は彼にとってそれだけで自律的であり、手も届かないし、それに余り興味がないから、それ故本来なら無視して構わぬ別世界でありながら、実は今回作者の抱える問題が大いに political であるばかりに、それを制度上解決する権限を持つ政治の当事者である上流人を無視する訳にはいかないのだ。政府や議会から頼まれた訳でもないのに、彼が自ら世情視察員を任じ、VLを通じて万が一にも当局を動かせるのなら万々歳だと思っていたとするなら、上流人を諷刺する必要がないどころか、それではかえって拙いのである。彼等にたとえ少々問題があっても、彼等を信頼する姿勢を崩さないことが肝要である。現実社会の手近な問題を深刻に受けとめればとめる程、この彼の手の届く所に住む腐敗分子の振る舞いが彼の癩の種になることはあっても、上流人の倫理的腐敗などはこの際余り問題にすることはない。世情視察員として法律の改正を促すという彼の所期の目的を達成するには、相手方の機嫌を損じてもつまらないし、向うの世界に譲歩できる所までは表現にも妥協の余地があるということになる。

しかし、作者のこういう構え方は、作品を高く超えた視点からの深い irony を産み出す余地がある。もしも、persona の裏の作者自身が実際は JW を書いた時と同じ視点から現実を眺めていたとしたら、VL は irony

の化け物である可能性もある。もしそうだとすると、本論などは作者の掌の上で駆け回った哀れな筆者の足跡に過ぎなくなる。しかし、晩年の著作等でうかがい知る限り、彼はかなりの現実主義者となっているとしか見えないからそれ程までの irony はないはずだ。一抹の不安は残しつつも、これまでの観点を保つなら、Fielding が悪徳政治家などには相変わらず批判的であったとしても VL における当面の怒りの対象は彼等ではなく、彼の身近な所で私利のみを追って動く“mob”である。彼は彼等の出鱈目な行動がやたら目につき憤慨することしきりであるが、彼自身も言うように、彼の憤りは公共の利益を慮るが故であって、決して私憤ではない<sup>66</sup>。この公憤の旅人がどのような問題を提起していくか、次章以降で具体的に見ていくことにする。

(つづく)

[注]

- (1) 同じ年に二種類の版が出ているが、後に出た方が作者の遺稿に忠実であるので、本論ではそれに基づく Everyman's Library edition をテキストに使用した。本論におけるこの作品からの引用はこの版による。なお、Fielding のその他の作品からの引用は全て *The Complete Works of Henry Fielding*, ESQ ed. by E. Henley (Barnes & Noble, rpt. 1967) による。
- (2) “... with no fewer or less diseases than a jaundice, a dropsy, and an asthma, ...” (Introduction to VL). なお、本論のこころ辺りにまとめられた作者の病気等に関する事情は同所に詳しく述べられている。
- (3) *TJ*, Bk. V, ch. vii.
- (4) VL, p. 277.
- (5) C. E. Batten は特に実話に属するものについてこの convention を指摘するが、当然本物と思わせようとした偽の旅行記 (travel lie) にもあてはまる部分があるはずである。See C. E. Batten, Jr., *Pleasurable Instruction: Form and Convention in Eighteenth-Century Travel Literature* (University of California Press, 1978), chs. II, III. 本論で「紀行文形式の作品」として一まとめ

にしている作品群は、大まかに分けると、1) 本物の旅行記/2) 本物と思わせようとした偽の旅行記/3) 虚構であることが初めから明白な旅行記又はこれに類する物語作品/の三種類になる。このような分類については、Percy G. Adams, *Travelers and Travel Liars 1660-1800* (New York: Dover Publications, rpt. 1980), ch. I を参照。Adams の同書が特に 2) の種類のことを扱っているのに対して、Batten の前掲書は 1) の種類のものについての研究書であり、そして 3) のものについては Philip Babcock Gove, *The Imaginary Voyage in Prose Fiction* (Columbia University Press, rpt. 1975) がある。本論における紀行文学についての一般論はこれらの書に依る所が大きい。

(6) Cf. Batten *op. cit.*, p. 38: “While *travels* and *journey* carry no specific connotations, *voyage* usually describes a sea trip, and *tour* almost always narrates a trip during which the traveler always completes a circuit returning to the point from which he originally departed. Even so, travelers used these terms so often and in so many ways that they became interchangeable and hopelessly confused.”

(7) *JW*, Bk. I, ch. vii. 作者はここで腐敗墮落した大陸旅行を諷刺している。なお *JW* は当時出回った荒唐無稽な旅行記の *parody* としての性格も持っている。

(8) ホメーロス作/高津春繁訳『オデュッセイア』(筑摩書房 世界文学全集1) 5頁。

(9) “If the customs and manners of men were everywhere the same, there would be no office so dull as that of a traveller ...” (Preface to *VL*). 本文の『オデュッセイア』からの引用文中の「その俗」とは“customs and manners”のことに他ならない訳で、Batten も言うように風俗習慣はユリシーズ(オデュッセウス)の旅が語られた頃より旅人の観察や記録の主要な対象であったことになる (Batten, *op.cit.*, p. 96)。ただし、*The World's Classics* edition ではこの「俗」の部分“minds”になっており、同様に田中秀央訳(河出書房新社世界文学全集Ⅲ-1)では「心の機微」となっている。

(10) Cf. “... A real and valuable knowledge of men and things, both of which are best known by comparison.” (Preface to *VL*), “... not absolutely,

but comparatively ...” (*VL*, p. 269).

- (11) 後で述べるように、作者もこの表現をつかっているが、“observations”と“reflections”の間に厳密な区別はない。Batten はこの両者が意識的にはつきりつかい分けられた具体例を示しているが、その場合大体前者は事実の描写で、後者は事実に対する作者の感想というニュアンスが強いようである。そして、紀行文においては、前者が本質的な部分を占めたことを指摘する (Batten, *op. cit.*, pp. 82ff.)。本論は、*VL* がこれとは反対の傾向を見せていることを示すことになる。
- (12) Donald Greene は、十八世紀の英国人の知的な営みにおける経験の役割を理性の役割よりも重視し、それとの関連で observation について、“... knowledge is acquired by observation, by sensory experience, of the world outside oneself;...” (“Augustinianism and Empiricism,” *ECS*, I, 1, 58) と述べている。
- (13) Preface to *JA*.
- (14) “Though we have properly enough entitled this our work, a history, and not a life; nor an apology for a life, as is in more fashion; ...” (*TJ*, Bk. II, ch. i).
- (15) “There is nothing, I think, half so valuable as knowledge, and yet there is nothing which men will give themselves so little trouble to attain;...” (Preface to *VL*).
- (16) Cf. “... ignorant, unlearned, and fresh-water critics, who have never travelled either in books or ship, ...” (*ibid.*, Preface). これに関連し、*JA* で Adams 牧師が居酒屋の主人と口論した時の次の言葉も思い出される。“I will inform thee; the travelling I mean is in books, the only way of travelling by which any knowledge is to be acquired.” (Bk. II, ch. xvii).
- (17) “To make a traveller an agreeable companion to a man of sense” (Preface to *VL*), “an agreeable as well as an instructive companion” (*ibid.*, Preface). 又この点と「本の中の旅人」という点で、*TJ* の最後の方の作者の言葉、“As we have, therefore, travelled together so many pages, let us behave to one another like fellow-travellers in a stage-coach, who have passed several days in the company of each other;...” (Bk. XV III,

ch.i) も印象に残る。

- (18) 広い意味での十八世紀英国の紀行作家の代表的存在と言える Samuel Johnson がその好い例である。See Thomas M. Curley, *Samuel Johnson and the Age of Travel* (University of Georgia Press, 1976), p. 30. これに対し、中世の pilgrimage では curiosity は否定されるべきものであった。See Donald R. Howard, *Writers and Pilgrims: Medieval Pilgrimage Narratives and Their Posterity* (University of California Press, 1980), p. 16.
- (19) Preface to *VL*.
- (20) 作者は揶揄する反面で、この好古家の研究内容を通じて、ある意味で聖書（特にこの場合『創世記』）が旅行記の側面を持つことをにおわせている。それに Preface では、Herodotus や Thucydides や Xenophon などの古代の歴史家について好意的な発言をしている。これは紀行文学の伝統がホメロスや聖書に結びついているとか、又 Xenophon の *Anabasis* や Herodotus の *History* にもつながり、Johnson は紀行文を歴史の下位区分と考えていたという T. M. Curley の指摘を考え合わせるとなかなか興味深いものがある (Curley, *op. cit.*, p. 114, p. 245, pp. 52-53)。
- (21) Howard, *op. cit.*, pp. 6, 107.
- (22) 諸々の理由による他国への偏見については Adams, *op. cit.*, ch. X を見よ。
- (23) *VL*, p. 285. ただ W. Cross の言うように、リスボンが当時少なくともヨーロッパでは最も不潔な都市であったとするなら、一概に偏見と決めつける訳にもいかない (W. L. Cross, *The History of Henry Fielding*, Vol. III, p. 59)。
- (24) Curley, *op. cit.*, p. 68.
- (25) *VL*, p. 273.
- (26) Batten, *op. cit.*, p. 13.
- (27) 自分自身の国を、病にかかった友人と見なし、それを治すための知恵を世界中に求めるのが“philosophic traveler”だという考え方があったそうだが (Batten, *op. cit.*, p. 73), *VL* の作者はその意味では大体 “philosophic traveller” だと言える。
- (28) “... the regulation of the mob... between the mob and their betters.” (*VL*, p. 238).

- (20) e.g. “... private interest to advance at the expense of the public” (p. 221), “... out of their private fortune; ... yet the public, to whom the price is due, incurs no debt or obligation ...” (p. 240).
- (30) これと並んで “the governors of such monsters” (p. 221) とか “our governors” (p. 241) のように “governor” という語も、一般的に社会の指導的な立場にある人達を表わす語として用いられている。これに類するのが “magistrate” という語で、治安判事という意味だけではなく、次のように広い意味で指導的な立場の人を指すが、地位的にやや低いようである。“... the magistrates, that is to say, the churchwarden, the overseers, constable, and tithing-man ...” (p. 226).
- (31) VL, p. 221.
- (32) *The Complete Works of Henry Fielding, ESQ* ed. by E. Henley, Vol. XVI, p. 298.
- (33) *Jonathan Wild and The Voyage to Lisbon* (Dent & Dutton, 1978), p. 303.
- (34) F. H. Dudden, *Henry Fielding: His Life, Works, and Times* (Oxford: Clarendon Press, 1952), p. 1015.
- (35) Cross, *op. cit.*, Vol. III, p. 63.
- (36) 作品に認められる旅人のタイプは、見方によれば一種の persona と認められる。そうすると VL の作者は前にも述べたように “philosophic traveller” でもあるが、その不機嫌さから判断すれば “splenetic traveller” でもあり、より本論にふさわしい言葉を遣えば “patriotic and indignant traveller” と呼べる。ただ、本文の出だしの部分の、“On this day the most melancholy sun I had ever beheld arose, and found me awake at my house at Fordhook.” (p. 201) という表現は、二度とふたたび会えないかもしれない最愛の幼い我が子を後に残して旅に立つ朝の、作者の何ともやり切れぬ気持を反映するものだから、その中の “melancholy” をとらえて直ちに、彼が “melancholic (or splenetic) traveller” である証拠とするのは、余りにも機械的な論法で頂けない。
- See Batten, *op. cit.*, p. 74.
- (37) Brian McCrea, *Henry Fielding and the Politics of Mid-Eighteenth-*

*Century England* (Athens: The University of Georgia Press, 1981), p. 196. 彼は同書で *VL* の “great” の用法について “bitter and ironic use” (p. 192) とか “uncertain use” (p. 195) と言っており、本論と相当の解釈の違いを見せる。

- ⑧ Cf. “This latter fatigue was...heightened by indignation which I could not prevent arising in my mind. ... No man who knew me will think I conceived any personal resentment at the behaviour; ...” (*VL*, p. 202), “at the expense of my own indignation” (*ibid.*, p. 254).